

# 持続可能な社会構築のための環境教育に 金子みすゞの童謡が果たす役割について

田中俊明

## 要旨

金子みすゞの童謡は、一昔前までの日本人、特に生まれ故郷である山口県長門市仙崎周辺の人々の自然や生きものに対する世界観や価値観を背景にして生まれてきたと考えられる。それにもかかわらず、みすゞの童謡の世界観や価値観は、SDGs達成に貢献するような持続可能な社会構築のための環境教育において、比較的低年齢の子どもたちの心に育みたい世界観や価値観と共鳴し一致している。人間と他の生物や自然が互いに関係しあうことで成り立っているという世界観、さまざまな境遇や立場の人々や生物・自然に多様性を認めてそれらの公平性を保つという価値観、そして身近な自然への共感や親愛を育むのに適した教材であると考えられる。しかも、みすゞの童謡は易しい口語で七五調のリズムをつけて謡われているので、幼児もふくめて比較的 low年齢の子どもたちにも理解しやすい。本論文では、持続可能な社会構築のための行動を引き起こす動因となるような世界観や価値観を育む環境教育に、みすゞの童謡が果たす役割について考察した。

キーワード：金子みすゞ、環境教育、持続可能な社会、自然、SDGs

## <1>はじめに

社会・経済・環境にかかわるさまざまな課題が山積し、多くの国の存続と地球の生物維持システムの存続が危ぶまれている。こうした現状をうけて、2015年の国連総会において、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された（国連総会、2015）。近年よく耳にするSDGsとはこの中の持続可能な開発目標のことである。SDGsにおいて、17のゴールと169のターゲットは統合され不可分のものであり、ばらばらに達成を目指すのではなく、社会、経済、環境の3つの側面を調和させるものであることが強調されている。こうした国際的な動向のなかで、平成29年3月31日公示の幼稚園、小学校、中学校の新学習指導要領の前文には、「これからの学校（幼稚園）には、（中略）一人一人の生徒（幼児・児童）が、（中略）自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする（中略）ことが求められる」と明記された。まさに現在、幼稚園や小中学校においてSDGs達成に貢献するような持続可能な社会構築のための環境教育が求められている

といえる。

持続可能な社会構築のための環境教育が実効性を持つためには、まだ子どもが比較的低年齢のうちから、持続可能な社会構築のための行動を引き起こす動因となるような世界観や価値観を子どもたちの心に育むことが重要になってくると思われる。人間の活動(社会、経済)と自然(環境)を、従来の人間 vs 自然といったような対立の構図でとらえるのではなく、まずはそれらが不可分のものであり複雑に絡まりあって関係しあうことで存在しているという世界観を育むこと。加えて、社会・経済的に、人種、性別、国籍、文化などさまざまな境遇や立場の人々の多様性を認め、それらの公平性を保つという価値観を育むこと。さらに、環境的にも人間以外の生物など自然に多様性を認め、それらの公平性を保つという価値観を育むことから始まるだろう。ただし、そうした教育において注意しなければならないのは、比較的低年齢の子どもたちが身近な自然への共感や親愛を育む前に、人間の活動による熱帯雨林の破壊や滅びゆくたくさんの動物たちの悲しい姿など、環境問題の深刻な現状を伝える教材を使って、その改善を熱心に訴えれば訴えるほど、それらが深刻なだけにかえって環境問題に対する忌避感を子どもたちに与えることになってしまふということが言われていることである(ソベル, 2009)。比較的低年齢の子どもたちに、自然や環境に対する忌避感を引き起こすことなく、なおかつごまかさないうで、上記のような世界観や価値観、そして身近な自然への共感や親愛を育めるような教材はないものだろうか。本論文では、そのような教材のひとつとして、金子みすゞの童謡を推薦したい。金子みすゞは、明治36年に山口県大津郡仙崎村(現:長門市仙崎)に生まれた。複雑な家庭環境に育ち、不幸せな結婚をし、昭和5年に26歳で自死をとげるという悲しい生涯をおくった童謡詩人である(矢崎, 1993)。その生涯に512編の童謡を残した。それらの童謡のなかで、この薄幸の詩人のやさしい眼差しは、人間、生物、無生物にかかわらず、自分と同じ立場のさびしい存在、弱い存在、虐げられた存在、あまり顧みられることのない存在など、さまざまなマイノリティーたちに向けられている。今野勉(2007)は、「弱いもの、日陰に生きるもの、恵まれないもの、心やさしいものへのみすゞの眼差しは、ありとあらゆるところへ注がれている」、「みすゞが、さびしいもの、役に立たないと誤解されるもの、不運なものなどを探し出す感覚は、尋常ではない」と述べている。彼女は、立場の異なるものたちの心を想像し、異なった視点や相反する感情などをごまかしてしまうことなく、異なったもの同士が異なったまま存在するさまをみごとに童謡に表現している。みすゞの童謡のなかには、そうしたマイノリティーたちの価値を公平に認めようとするあたたかくてやさしい思いやりの心がいっぱいにつまっている。もとより、さまざまなものに価値を認めるには、それ以前にそのものの存在に気づく必要がある。そのものの存在に気づくことではじめて価値が生まれるのである。みすゞの童謡は、現代人があまり目を向けられないようなさまざまなものたちの存在に気づかせてくれる。特に、カーソン(2021)は何気ない自然の不思議に目をみはる感性をセンス・オブ・ワンダーと呼んだが、みすゞの童謡にはたくさんの生物や自然が登場し、それぞれが価値あるものとして描かれている。身近に出会う何気ない生物や自然の存在の価値に気づかせてくれるようなセンス・オブ・ワンダーにあふれた作品がたくさんある。さらに、そうした作品の中で、人間もまた自然の一部であり、他の生物や自然とのつながりのなかで互いに関係しあい

ながら存在しているという視点にも気づかせてくれる。

金子みすゞの童謡が生まれた背景にある世界観や価値観として、おそらく古来より日本人が形成してきた自然の一部としての人間という関係性の認識、自然に対する豊かなアニミズム的感性、動植物に対する思いやりの文化の伝統が息づいていると考えられる。一方、SDGsなど国際的な環境問題をめぐる現在の動向の背景には、これまでの英米を中心とした環境思想において、マグナカルタにはじまり、奴隷、女性、アメリカ先住民、労働者、黒人、人間以外の生物・自然へと、自然権が次第にマイノリティーへと拡大する方向で変遷してきたという歴史の流れがあると考えられる(ナッシュ, 1999)。みすゞの童謡は、こうした西洋の環境思想の変遷の系譜とはまったく異なる系譜から生まれてきたと考えられる。しかしながら、みすゞの童謡の世界観や価値観は、これからの時代の環境教育において子どもたちの心に育みたい世界観や価値観と共鳴し一致している。しかも、みすゞの童謡は易しい口語で七五調のリズムをつけて語られているので、幼児をふくめて比較的低年齢の子どもたちの心のなかにそれらの世界観や価値観を育むための教材として適していると考えられる。

本論文では、人間・人間以外の生物・自然の関係性、人間・人間以外の生物・自然の多様性と公平性、自然に対するセンス・オブ・ワンダーの3つの切り口から、持続可能な社会構築のための行動を引き起こす動因となるような世界観や価値観を育む環境教育に、みすゞの童謡が果たす役割について考察する。なお、以下の本論文中で引用するみすゞの童謡はすべて、現代仮名づかい版金子みすゞ童謡全集(全6冊)(金子みすゞ, 2003)に依る。

## <2> 人間・人間以外の生物・自然の関係性

みすゞの作品には、人間と他の生物や自然が互いに関係しあうことで成り立っているという事実を考えさせてくれるものと、食べるという行為を通して人間と他の生物との関係性を考えさせてくれるものがある。以下、関係しあうことで成り立つ世界と食べる食べられるの関係性とに分けて考察する。

### 2-1 関係しあうことで成り立つ世界

土

こつつん、こつつん、／<sup>ふ</sup>打たれる土は、／よい畑になって、／よい麦生むよ。／朝から<sup>ばん</sup>晩まで、／<sup>ふ</sup>踏まれる土は、／よい<sup>みち</sup>路になつて、／車を通すよ。／<sup>ふ</sup>打たれぬ土は、／<sup>ふ</sup>踏まれぬ土は、／要らない土か。／／いえいえそれは、／名のない草の／お宿をするよ。

土は人間の役に立つが、人間の役に立たない土は「要らない土」かというところではなく、「名のない草の／お宿をするよ」という最後の連で、自然のなかでさまざまな植物を育てている土の役割のすばらしさに気づかされる。土は陸の生態系のなかでさまざまな生物と関係しており、人間も含め生物にとって大きな役割を果たしているということがわかり易く描かれている。人間と

の関係性で土は打たれたり踏まれたりしている。本当は多大な恩恵を被っているにもかかわらず、人間にあまり見向きもされない土の立場になって謡われている。みすゞの童謡の特徴として、他の生物や自然の立場に視点を転換して描かれることが多いという点があげられる。読者は、いつの間にか人間の視点ではなく他の生物や自然の視点に立って感じたり考えたりすることになり、はっとさせられる。他に「土と草」や「浜の石」という作品でも、生物・無生物が互いに関係しあいながら成り立っているという視点が示されている。

蓮と鶏

泥のなかから／蓮が咲く。／／それをするのは／蓮じゃない。／／卵のなかから／鶏がでる。／／それをするのは／鶏じゃない。／／それに私は／気がついた。／／それも私の／せいじゃない。

蓮と鶏を例に、個々の事物は単独で生起するのではなく、他とのつながりにおいてさまざまな原因が作用した結果として生起するという考えさせてくれる。個々の事物がいまあるように存在するのは、他とのつながりによるという、事物の成り立ちを関係性で見る視点を提供してくれている。「蓮と鶏」と同系統の詩で、薬や石や砂ができる原因を考えさせてくれる「つくる」もある。

梨の芯

梨の芯はすてるもの、だから／芯まで食べる子、けちんぼよ。／／梨の芯はすてるもの、だけど／そこらへほうる子、ずるい子よ。／梨の芯はすてるもの、だから／芥箱へ入れる子、お利巧よ。／／そこらへすてた梨の芯、／蟻がやんやら、ひいてゆく。／「ずるい子ちゃん、ありがとよ。」

梨の芯をポイ捨てしたずるい子のお陰で、梨の芯のごちそうを手に入れることができた蟻が、ずるい子にお礼を言うという作品である。コミカルな表現を使って、人間が意図せずに行ったことが別の生物に影響を与えるという関係性がみごとに表現されている。

木の実と子供

こぼれた木の実のはひろわれる、／紺屋のまま子にひろわれる。／／紺屋のまま子は叱られる、／／ひろわれた木の実はすてられる、／紺屋のお背戸にすてられる。／／すてられた木の実の芽がのびる、／紺屋のまま子の知らぬまに。

この作品でも、まま子の知らぬまに捨てた木の実の芽がのびるという、「梨の芯」と同様の関係性のなかで、動物（人間）による種子散布について考えさせてくれる。捨てられた木の実と養親に育てられているまま子の境遇を重ねることで、木の実が芽を伸ばすように、まま子であってもすすくと育ってほしいというみすゞのやさしい心が暗に示されているように思われる。ちなみに、紺屋のまま子はみすゞの親戚の下田カヨさんという実在の人物だそうである（今野、

2007)。

以上のように、自然の事物をつながりで見るという環境を考える上で大切な視点に、読者はいつのまにかすんなりと立つことができる点がみすゞの童謡のすばらしさであると思う。

## 2-2 食べる食べられるの関係性

おさかな

海の魚はかわいそう。／／お米は人につくられる、／牛は牧場で飼われてる、／鯉もお池で麩を貰う。／／けれども海のおさかなは、／なんにも世話にならないし、／いたずら一つしないのに、／こうして私に食べられる。／／ほんとに魚はかわいそう。

なんの罪もない生物の命を奪わなければ生きられないという葛藤をこの作品は淡々と描いている。生物は、他の生物の命を奪わなければ生きられない。生きるためには他の生物を食べることは避けられない。環境教育において、他の生物の命を奪わなければ生きられない人間が、他の生物の命を大切にするべきと教えるのは矛盾していることにはならないのだろうか。この作品は、この矛盾をごまかしてしまうことなく、魚を食べる人間を責め苛むのでもなく、矛盾を受け入れ、ただ魚をかわいそうと思って食べるという道を示してくれる。そう思って生物に接するようになれば、人間が生きていくのに必要最小限の殺生にとどめるという倫理が働くだろう。SDGsにもあるとおり世界には貧困や飢餓で苦しんでいる人々がいる。それにもかかわらず、日本の年間食品ロスは約600万トン（農林水産省・環境省、2017年）であるという事実、食品のほとんどは生物からつくられているという事実をあわせて考えると、他の生物を食べて人間は生きていくという感覚とかわいそうと思って食べる教育の重要性が浮き彫りになってくるのではないだろうか。

大漁

朝焼小焼だ／大漁だ／大羽鱈の／大漁だ。／／浜はまつりの／ようだけど／海のなかでは／何万の鱈のとむらい／するだろう。

この作品では、人間も魚も同じ対等の視点でとらえられている。人間中心の視点だけで考えれば、魚や野菜など食べものがたくさん獲ればお祭り騒ぎになるのは当然であるだろう。しかし、この作品は人間の視点とは別の視点を与えてくれる。他の生物の多様性を認め公平性を保つことを教えるこれからの環境教育においては、この作品のように、人間の視点だけでなく他の生物の視点に立って考えることができるようになる必要があるだろう。もちろん、人間は他の生物の命を奪わなければ生きていけないのではあるが、同じ命を奪うにしても、当然と思って奪うのと、他の生物を思いやりつつ奪うのでは結果がちがってくるであろう。生物多様性の喪失など現在の環境問題は、前者の視点のみで人間が活動してきた結果でもありと考えられる。人間の生存は他の生物の存在を前提としており、他の生物との関係なしには人間の生存はありえない。切っても

切り離せない関係なのだ。その意味でも、この作品のように人間と他の生物とを対等にとらえる視点を教える必要があると考える。

### 鯨法会

鯨法会は春のくれ、／海に飛魚採れるころ。／／浜のお寺で鳴る鐘が、／ゆれて水面をわたるとき、／／村の漁師が羽織着て、／浜のお寺へいそぐとき、／沖で鯨の子がひとり、／その鳴る鐘をききながら、／／死んだ父さま、母さまを、／こいし、こいしと泣いています。／／海のおもてを、鐘の音は、／海のどこまで、ひびくやら。

環境教育において捕鯨の是非は難しいテーマのひとつであるだろう。西洋諸国と日本との捕鯨に対する伝統や文化をめぐる議論に加えて、高い知能を備えたクジラに対する動物福祉や動物の権利など動物倫理の観点からの議論などもあり、捕鯨の是非をめぐる議論は複雑化している（伊勢田，2008）。その上、政治的な駆け引きまでもがからんできている（佐久間，2009）。このような錯綜した状況の中で、捕鯨の是非について一つの正解を得ることは難しいと思われる。しかしながら、他の環境問題も同様であるが、環境教育においてはひとつの正解を教えるよりも、問題について考えることの重要性を教えることが大切であると思われる。捕鯨の是非の結論はだせないとしても、この「鯨法会」では、一昔前までの日本人が、とりわけ山口県の大津郡仙崎（現：長門市）周辺の人々がクジラとどのように関わってきたかを考えさせてくれる。みずぶが生きた明治の後半から昭和のはじめの時代には、現在のような捕鯨をめぐる環境問題はまだ存在していなかった時代である。仙崎は、江戸初期から明治初期まで日本有数の捕鯨基地であったという（朝日新聞社編，1999）。当時は網捕りによる捕鯨が行われていたそうである。鯨が網にかかる、船から鉆を打ち込み、腰を剣で突き刺す。弱ったところで勢子船から鯨に飛び乗り、鯨の鼻を切り、麻縄を通して捕獲したそうである。寄り鯨は、鯨一頭獲れば七浦潤う、というくらいの大きな収入を浜にもたらしたそうである（岡田，2009）。伝統の寄り鯨漁は漁師の知恵と勇気を示すものでもあったが、捕鯨は彼らに殺生の苦しみを感じさせ、罪悪感を覚えさせるものであったという。それゆえ犠牲となった鯨の胎児を供養する鯨墓を建立したり、鯨位牌や鯨鯨過去帖をつくったり、鯨法会を営み、鯨たち魚族の平安を祈って女兒を出家させることさえもしてきたという。驚くべきことに、青海島の大日比にある西円寺内の尼寺、法船庵の過去帖には、人間の戒名と鯨鯨魚鱗がまったく区別なく並んで記されているという（岡田，2009）。まさに一昔前の日本人、仙崎周辺に住む人々は、生物を殺して食べるという葛藤に向き合うなかで、生物・自然にも多様性を認めてそれらの公平性を保つという価値観を形成していたことが推測される。こうした文化的背景が、みずぶに「鯨法会」をつくらせたと思われる。みずぶは「鯨捕り」という作品で、勇壮な古式捕鯨のようすを描いているが、その最後の連で「いまは鯨はもう寄りぬ、／浦は貧乏になりました。」と結んでいる。みずぶがこの作品を書いた時代には、すでに寄り鯨の数は減っていたようである。ちなみに、鯨供養や鯨霊簿の伝統は鯨をあまり捕らなくなった現在もまだ続いているそうである。岡田（2009）は、六度目の大絶滅がおりつつある現代において、日本的な

環境共生の道を継承・再生するのに、(動物) 飼育の伝統は有効であると述べている。

### <3> 人間・人間以外の生物・自然に多様性を認めてそれらの公平性を保つ視点

みすゞの童謡には、当時の女性をはじめ社会の不公平に直面している子どもたち、他の生物、無生物にまで、さまざまなものたちの境遇や立場を考えたり、思いやりする作品が多数ある。人間・他の生物・自然に多様性を認めてそれらの公平性を保つような価値観を育むための環境教育に適していると思われる作品を、みんなちがってみんないい、社会的な不公平に直面している子どもたちへの思いやり、人間以外の生物や自然への思いやりの3つに分けて考察する。

#### 3-1 みんなちがってみんないい

わたし私とすず小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、／お空はちっとも飛べないが、／飛べる小鳥は私のように、／じべた地面を速くは走れない。／私がからだをゆすっても、／きれいな音は出ないけど、／あの鳴る鈴は私のように、／うたたくさんな唄は知らないよ。／鈴と、小鳥と、それから私、／みんなちがって、みんないい。

あまりにも有名な作品だが、環境教育的には人間も他の生物も無生物も、この宇宙にある森羅万象は、命のあるなしにかかわらず、みな等しい価値をもっており、「みんなちがって、みんないい。」と読める。まさに、多様性を尊重するこれからの環境教育にピッタリの作品である。

分子生物学を含む現代生命科学において、「生きているもの」と「命なき物質」の境界は、徐々に曖昧なものとなりつつあると言われている(床呂, 2018)。こうした近未来の生命観を視野にいれつつ、この作品のもつ意味を考えるとさらに興味深い。

#### 3-2 社会的な不公平に直面している子どもたちへの思いやり

女の子

女の子って／ものは、／木のぼりしない／ものなのよ。／竹馬乗ったら／おてんばで、／ぶ打ち独楽するのは／こまお馬鹿なの。／わたし私はいだけ／知ってるの、／だって一べんずつ／しか叱られたから。

当時の日本の女性に対する理不尽さに不満を持ちながらも、なんとか自分を納得させようとしている女の子の気持ちが謡われている。他にも「女のくせに」と叱られる「小さなうたがひ」や女の子であることの絶望を迷子の星にたとえた「やみよ闇夜の星」という作品もある。逆にもしも私が男の子ならもっと自由なのという願望を謡った「男の子なら」という作品もある。みすゞが生きた時代の日本における女性のおかれた立場を通して、SDGsの目標にもあるジェンダー平等について考えるきっかけにできる。

みすゞの童謡には当時の社会の不公平に直面している子どもたちを謡った作品もいくつかある。「曲馬の小屋」では、「テントの隙にちらと見た、／弟に似たような曲馬の子、／なぜか恋しい、なつかしい」と、当時の人々が暗いイメージを抱いていた曲馬団（サーカス）や底辺に生きる子と考えた曲馬の子（今野，2007）へのノスタルジックな心情が、弟や母さんのイメージと交錯させながら切なく謡われている。「木屑ひろい」では、「小さなお小舎で、母さんと、／とろとろ赤い火を燃して、／父さんの帰りを待つために」、朝鮮人が楽しげにこぼれ木屑をひろう姿が描かれている。「夜の雪」では、雪が舞う夜の街で、視覚障害者とその子どもが明るい窓から流れてくるピアノを聴いている情景が描かれている。「ピアノはうたう、／こころをこめて、／ふたりのために、／春の日の唄を。／／牡丹雪、こ雪、／ひらひら舞うよ／二人のうえに／あたたかく、うつくしく」とピアノと雪がふたりを祝福する。巡礼の子を思いやる童謡には、「巡礼」と「巡礼と花」の二つがある。「まち」では、「乞食の子供と／けむりの影が」、「春の日の街」を通る姿が描かれている。「月のひかり」では、月の光が「まずしいみなし児」の眼に入って夜明けまで静かに明るく照らしてあげる。

今野勉（2007）は、「朝鮮の子、巡礼の子、曲馬の子、乞食の子、盲目の片親の子などは、童謡になじまない題材である。しかし、みすゞは、社会の最底辺に生きる子供たちに、しっかりと目を注いでいる」と述べている。こうしたみすゞの視点は、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓うSDGs時代の環境教育において、子どもたちの心に育むべき重要な視点であると考えられる。ただし、残念なのは、一部の呼び名に現代では差別的と考えられる言葉が使われていることである。このため、この節の作品を用いた教育は、少し年齢の高い子どもたちを対象に、差別や人権を考える道徳教育とあわせておこなうのが適当であると思われる。

### 3-3 人間以外の生物や自然への思いやり

すずめ  
雀のかあさん

子供が／子雀／つかまえた。／／その子の／かあさん／笑つた。／／雀の／かあさん／それみ  
てた。／／お屋根で／鳴かずに／それ見えた。

この作品では、人間の親子にとって楽しい行為が雀の親子にとっては残酷でつらいことであることを、雀のかあさんが鳴かずに子雀をじっと見ているという淡々とした描写を通して考えさせてくれる。この淡々とした描写によって、かえって雀の親子の悲愴な心情が伝わってくる。子雀を見守る雀のかあさんへのみすゞの同情的な眼差しと同時に、子雀を捕まえた子どもを見て笑っている人間の母親に対する批判的な眼差しも、その対比によって効果的に表現されている。

みそはぎ

ながれの岸のみそはぎは、／誰も知らない花でした。／／ながれの水ははるばると、／とおく  
の海へゆきました。／／大きな、大きな、大海で、／小さな、小さな、一しずく、／誰も、知らない  
みそはぎを、／いつもおもって居りました。／／それは、さみしいみそはぎの、／花からこぼ

れた露でした。

誰も知らないさみしいミソハギの花からこぼれた露が遠路はるばる大きな大きな大海まで流れていってからも、小さな小さな一滴としてミソハギをおもうという、みすゞのマイノリティーを思いやる気持ちがとても美しく謡われている作品である。他の生物や自然の存在に気づき、それらを思いやる心を育成することは、まさに生物多様性保全の態度を育成することに直結すると思われる。

すべてをリストアップすることはできないが、上記以外にも他の生物や自然を思いやる作品は多数ある。以下に作品のタイトルのみを紹介する。「雨のあと」、「お家のないお魚」、「お乳の川」、「親なし鴨」、「こほろぎ」、「芝草」、「白い帽子」、「雀と芥子」、「蟬のおべべ」、「積もった雪」、「露」、「楊とつばめ」、「藪蚊の唄」、「雪」などがある。

#### <4>自然に対するセンス・オブ・ワンダー

##### 不思議

わたしは不思議でたまらない、／黒い雲からふる雨が、／銀にひかっていることが。／／私は不思議でたまらない、／青い桑の葉たべている、／蚕が白くなることが。／／私は不思議でたまらない、／たれもいじらぬ夕顔が、／ひとりではらりと開くのが。／／私は不思議でたまらない、／誰にきいても笑って、／あたりまえだ、ということが。

金子みすゞ作品鑑賞事典（詩と詩論研究会，2014）のこの作品についての解説欄には、生きていくすべてのものへの深い愛情、眼差しは仙崎の人々に自然に根付いているものであり、みすゞの感性もそうして育まれたとある。また、みすゞの自然に対する畏怖と畏敬の念があふれていて読者はハッとするともある。まさに、みすゞのこの感性は、カーソン（2021）のセンス・オブ・ワンダーと通じるものであると思う。みすゞの童謡には、他にもセンス・オブ・ワンダーにあふれた作品が多数ある。擬人的な表現が使われている作品も多く、幼児でも興味を示しやすいと思われる。できるだけ低年齢のうちから、みすゞのセンス・オブ・ワンダーにあふれた作品を誦うことに加えて、野外へ出かけて作品に登場する実際の自然を体験することを繰り返す。そうすれば、子どもたちは身近な自然に対して共感と親愛の情を自然な形で育むことができるだろう。カーソン（2021）は、「子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです」と述べている。子どもたちの心に、まずはセンス・オブ・ワンダーの土壌をつくり、少し成長してから環境問題の知識を伝えてやるようにすれば、真に実効性をともなった持続可能な社会構築のための環境教育になるはずである。みすゞの童謡は、子どもたちをセンス・オブ・ワンダーの世界にいざなう道しるべとなってくれる。

以下に、みすゞの童謡のなかでセンス・オブ・ワンダーを感じられるような作品のタイトルのみを紹介する。自然の不思議をおもうタイプの作品としては、「不思議」のほかに、「海とかもめ」、

「海の鳥」、「空の色」、「なぞ」、「星とたんぽぽ」などがある。

自然のしくみや性質を感じるタイプの作品としては、「明るい方へ」、「雲のこども」、「木」、「水と風と子供」などがある。

自然に変身して遊ぶタイプの作品としては、「雲」、「さくらの木」、「草原」などがある。

その他さまざまな自然の魅力を感じるタイプの作品としては、「青い空」、「秋のおたより」、「秋日和」、「朝顔の蔓」、「雨あがり」、「海のこども」、「海の果て」、「丘で」、「落ち葉のカルタ」、「草山」、「月と雲」、「月の出」、「月日貝」、「つばめ」、「波」、「野焼きとわらび」、「光る髪」、「螢のころ」、「水と影」、「もういいの」、「夕顔」など多数ある。

### <まとめ>

以上に考察してきたとおり、みすゞの童謡は、一部を除いて比較的低年齢の子どもたちに、人間と他の生物や自然が互に関係しあうことで成り立っているという世界観、さまざまな境遇や立場の人々や生物・自然に多様性を認めてそれらの公平性を保つという価値観、そして身近な自然への共感や親愛を育むような、これからの環境教育に適した教材であると考えられる。同時に、古来より日本人が形成してきた人間と他の生きものや自然との関係性を学ぶ教材としても用いることができる。ただし、みすゞの童謡を用いた環境教育では、単に作品を読んで考えるだけでなく、併せて子どもたちがみすゞの視点で人間も含めた自然界を眺めることができるようになるための体験的な学びを工夫することが大切である、ということを最後に付言したい。

### <引用文献>

- 朝日新聞社（編）（1999）幻の童謡詩人「金子みすゞの世界」展 朝日新聞社
- 伊勢田哲治（2008）動物からの倫理学入門 名古屋大学出版会
- 岡田真美子（2009）不殺生の教えと現代の環境問題 中村生雄・三浦佑之（編）人と動物の日本史4 信仰のなかの動物たち 吉川弘文館
- 床呂郁哉（2018）21. 生命 奥野克巳・石倉敏明（編）Lexicon 現代人類学 以文社
- カーソン、レイチェル 上遠恵子（訳）（2021）センス・オブ・ワンダー 新潮文庫
- 国連総会 外務省（仮訳）（2015）「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」 外務省
- 金子みすゞ 矢崎節夫（監修）（2003）現代仮名づかい版 金子みすゞ童謡全集（全6冊：①美しい町・上、②美しい町・下、③空のかあさま・上、④空のかあさま・下、⑤さみしい王女・上、⑥さみしい王女・下）JURA 出版局
- 今野勉（2007）金子みすゞふたたび 小学館
- 佐久間淳子（2009）「文化の対立を問う」— 捕鯨問題の「二項対立」を超えて 鬼頭秀一・福永真弓 編 環境倫理学 東京大学出版会
- 詩と詩論研究会（編）（2014）金子みすゞ作品鑑賞事典 勉誠出版
- ソベル、デイヴィッド 岸由二（訳）（2009）足もとの自然から始めよう 日経BP
- ナッシュ、ロデリック・F 松野弘（訳）（1999）自然の権利 環境論理の文明史 ちくま学芸文庫

農林水産省・環境省（2017）日本の食品ロスの状況（平成 29 年度）、食品ロスの発生量の推移（平成 24～29 年度）（PDF ファイル：<https://www.maff.go.jp/j/press/shokusan/kankyoi/attach/pdf/200414-1.pdf>）

矢崎節夫（1993）童謡詩人金子みすゞの生涯 JULA 出版局